

不登校児童生徒を支援する但馬やまびこの郷の研究

A Study on Tajima Yamabico no Sato which Supports “Non-attendance” Students

五百住 満*

Abstract

In 1998, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan defined “non-attendance” as “when a child wants, but is unable, to go to school due to psychological, emotional, physical, or social reasons (excluded are reasons such as illness and economic difficulties).”

Currently, there are a variety of programs and facilities to address the problem of “non-attendance” including public institutions and Free School. This paper explores what kind of measures need to be deployed for “non-attendance” children, and what issues are involved in their deployment, focusing on Tajima Yamabico no Sato (Hyogo Prefecture, Japan) which implements a variety of hands-on activities in partnership with schools and provides support to enhance children’s adaptability to school life, with the aim of helping children who want to go, but are unable, return to school.

キーワード：子どもの居場所、自尊感情、自律

はじめに

不登校は、アメリカ、イギリス、カナダなど高度の工業水準を保持し、財政状況もよく、義務教育が普及している国々から報告はされているが、発展途上の国々からの報告はほとんどない。

日本においては、1990年代以降一貫して重要な教育問題のひとつとして位置づけられているが、古くから問題とされてきた歴史があり、その位置づけと呼称が何度か変化してきている。

不登校が日本において、注目されはじめたのは、高度経済成長期に入った1960年代ころからである。1963年に厚生省児童局が刊行した『児童福祉白書』には、「高い経済成長を示しつつある国々の児童は、今や危機的段階にある」¹⁾と指摘し、物質的に豊かになり、文明が進めば、登校拒否などの情緒障害や非行、心身障害などが出てくるといっている。このころの不登校は一つの子どもの精神的な異常と考えられ精神医学的な治療が必要との観点から「学校恐怖症」という病名がつけられたが、その呼称は定着しなかった。しかし、1970年代に入って「登校拒否

という名前が与えられ、社会的にも認知されるようになった。そして、1970年代半ばから発生件数が増加するなかで、教育問題として社会的な関心を集めるようになった。しかし、「病気でもなく経済的理由でもなく」学校に行かない(行けない)子どもは、その原因が何であれ、そのこと自体が「病い」であり、何らかの方法で「治療」することが必要であるという大前提がまだあった。

1980年代に入って、校内暴力やいじめ、体罰や管理教育等「学校教育の荒廃」が叫ばれてくるころから、学校に行かない(行けない)のはむしろ正常な反応であるという主張が生まれ、それに伴って学校に行かない(行けない)ことの位置づけが動き始めるなかで、その呼称も1990年代に入って「不登校」という呼称に変化していく²⁾。

学校に行かない(行けない)は、「病いか否か」の決着は今なお着いていないが、不登校ということには「病い」と「個人の選択」という2つの意味が込められているのが今日の状況である。

ところで、このような「不登校」に関する文部科学省の最近の調査によると、我が国の小・中学校の

* Mitsuru IOZUMI 教育学部教授

1) 1963年厚生省『児童福祉白書』

2) 「いじめ・不登校」伊藤茂樹編著(日本図書センター)

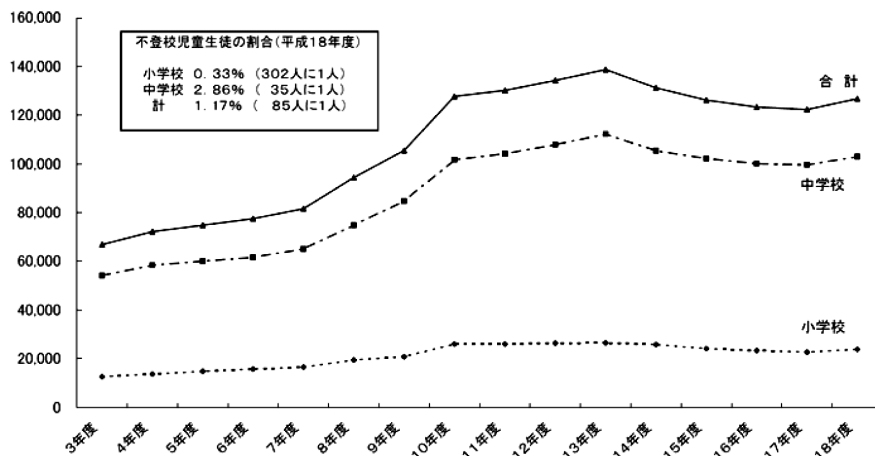


図1 不登校児童生徒数の推移 (平成18年度文部科学省調べ)

不登校児童生徒数は、2006年度には約12万7千人に上っており、平成1997年度以降は10万人以上と一向に減少する気配はない。

このような不登校の要因や背景については、「今後の不登校への対応の在り方について (報告)」(文部科学省2003年3月)の中で、「不登校は、家庭、学校、本人に関わる様々な要因が複雑に絡み合っている場合が多く、さらに、その背後には、個人の生きがいや関心の『公』から『私』への私事化、社会における『学びの場』としての学校の相対的な位置付けの変化、学校に対する保護者・子ども自身の意識の変化等、社会全体の変化の影響力が少なからず存在している。」³⁾としている。

確かに1960年以降、産業構造や社会構造が大きく変化していく中で、都市化・核家族化・少子化、地域での人間関係の希薄化等が進行し、また教育においては進学競争・塾通いの過熱化が激しくなっていく。このような状況が子どもたち同士群れて遊ぶ場を奪い、社会体験や対人関係の貧困を生み、その結果子どもの成長に必要な社会性・協調性・自主性を育てる機会を減少させ、人との心の結びつきや関係性をうまく築けない子どもを生み出すとともに、私事化現象という価値観の変化をももたらしていったのではないかと考えられる。我が国のこのような社会的・教育的背景が、家庭や学校で「心の居場所」を持たない子どもたちを生み出し、「不登校」を生じさせていったのではないかと考えられる。

1998年度以降文部科学省では「不登校とは、『何

らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、子どもが登校しないあるいはしたくてもできない状況にあること(ただし、「病気」や「経済的な理由」によるものを除く)』と定義している。

ここでは、先にも論述した「不登校」ということばの2つの意味合いである①特定の原因ないしは病因(「病い」)によって形成された学校に行けない行動と②学校を絶対視する価値観のゆらぎから学校に行かない(「個人の選択」)行動という大きく2つの意味が込められているのである。

すべての子どもに同じ教育を義務化して国家が提供するという明治以降続いてきた近代公教育の枠組みが今日の子どもに合わなくなっている側面もあるが故に「不登校」が生じているのかもしれない。だが、学校に行くことを「個人の選択」と捉え学校教育を否定すれば、義務教育制度そのものの根幹が大きく揺らぐ問題を孕んでいることは事実である。しかしながら、今日の学校での教育の在り方を考えていかなばならない時期にきていることは確かであると言える。

不登校の要因・背景は多様であることは事実であるが、表1にあるように、学校生活に起因する割合が最も高い状況にあるのも事実である。

これまで、不登校の解消に向け全国各地で様々な取組がなされてきている。しかし、学校・施設・NPO等それぞれがそれぞれの立場で教育支援を

3) 「今後の不登校への対応の在り方について (報告)」(文部科学省2003年3月)

表1 不登校になったきっかけ（2009年文部科学省調べ 小・中合計）

	要因	人数	割合
学校生活に起因	いじめ	4,526	3.5
	いじめを除く友人関係をめぐり問題	23,732	18.4
	教職員との関係をめぐり問題	2,452	1.9
	学業の不振	12,432	9.6
	クラブ活動、部活動への不適応	2,725	2.1
	学校の決まり等をめぐり問題	4,204	3.3
	入学、転編入学、進級時の不適応	4,892	3.8
家庭生活に起因	家庭の生活環境の急激な変化	7,902	6.1
	親子関係をめぐり問題	14,328	11.1
	家庭内の不和	6,264	4.8
本人の問題に起因	病気による欠席	9,727	7.5
	その他本人に関わる問題	50,146	38.8
その他		7,317	5.7
不明		5,375	4.2

行ってきているのが現状である。

このことから、本研究では学校と連携を深め「不登校」児童生徒の学校復帰に多大の成果を上げ、「不登校」を解消するために様々な対応を模索している「兵庫県立但馬やまびこの郷」の具体的な取組内容を分析する中で、不登校児童・生徒を支援していくためには何が有効なのかを考えてみることにした。

1 兵庫県立但馬やまびこの郷とは

但馬やまびこの郷は、兵庫県内に在住する不登校あるいは不登校傾向の小学生や中学生、その保護者、教職員を支援するために兵庫県教育委員会が1996年に設置した不登校に関するセンター的な教育機関である。

場所は、兵庫県北部の山東町に位置し、約60,000㎡の敷地を有し、やまびこの館（研修棟）、いろいろの館（和風の民家棟）、ゆったり温泉（浴室棟）、星の館（宿泊棟）、虹の館（体育館）、クッキング広場（野外炊飯棟）、クラフト広場（野外体験棟）、遊歩道（裏山）などが設置されている。

但馬やまびこの郷では、子どもたちが学校生活に適應できるように、豊かな自然の中で、自然、人及び地域とふれあう様々な体験活動と集団生活を通して、子どもたちの心を少しずつほぐしながら、子どもたちが人とかかわることの楽しさや喜びを実感させ、自分への自信を取り戻すためのサポートを行っている。子どもたちの次への一歩のために、常に「聴く、待つ、寄り添う、合わせる」を合言葉に、

子どもたちを力いっぱいサポートしている。

また、保護者への教育相談を含めたカウンセリング、教員等指導者の研修も並行して行うとともに、適応指導教室等との関係機関と連携を図るなど不登校のセンター的な役割も担っている。

施設での入所宿泊体験活動は、月曜日から金曜日までの4泊5日を原則としている（4月から翌年3月まで35回開設）が、1泊2日や2泊3日等、児童生徒の状況に合わせた活動もできる。また、見学や相談、1日だけの活動体験等、いろいろな利用も可能としている。

文部科学省は、不登校への対応にあたって、①将来の社会的自立に向けた支援、②連携ネットワークによる支援、③社会的自立のための学校教育の充実、④働きかけることややかかわりを持つことの重要性、⑤保護者の役割と家庭への支援の5つの視点を重視しているが、但馬やまびこの郷でも、これらの視点を十分に踏まえながら教育活動を展開しているのである。

但馬やまびこの郷を利用した児童生徒の数は、1996年～2010年で約3500名。そのうち学校復帰児童生徒の数は、年間利用者（約300名）の70%前後を占めている。また、宿泊体験活動に参加する児童生徒の利用者数も毎年増え続けている。

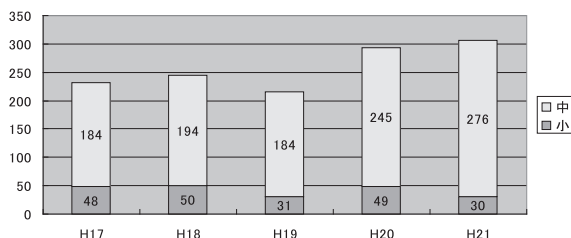
2 兵庫県立但馬やまびこの郷での活動とその分析

(1) 学校生活への適応性を向上させるための支援活動

① 但馬やまびこの郷の入所者数

表2 但馬やまびこの郷の入所者数（短期宿泊体験活動）の推移（のべ人数）

	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
小学生	48	50	31	49	30
中学生	184	194	184	245	276
合計	232	244	215	294	306



② 4泊5日の宿泊体験活動

但馬やまびこの郷では、月曜日から金曜日までの4泊5日を原則とした宿泊体験活動を重視している。自然、友だち及び地域の人々と触れ合う体験と

集団活動を通じて（表3）、自主及び自律の精神並びに人間相互の関係についての正しい理解を養い、学校生活に適応することができる力を培うよう支援している。

ア 体験活動の目的

- ・自分たちで作った料理をみんなで食べる、山を山頂まで登り切る等で満足感や達成感を味わわせることで、自分に対する自信をつけさせる。
- ・県下各地から集まった入所者が「個」から「小集団」へ、さらには「大集団」へと人間関係の輪を広げる。
- ・入所者が選択できる活動を多く取り入れ、自主性や主体性、判断力や自己決定力を培う。
- ・活動内容の時間的制約を少なくすることで、体験活動に打ち込ませ、存在感や達成感を味わわせる。
- ・親子で共に活動することを通して、互いの人間性を見つめ直し、親子関係の再構築を図る。

イ 体験活動の内容

a 出会いの集い・お互いを知ろう（1日目）

[内容と考察]

まず、スタッフ、ボランティアから自己紹介、そして入所者の自己紹介の順に行う。次に、施設の使

表3 但馬やまびこの郷のプログラムの概要

時刻	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
7:00		起床 朝食	起床 朝食	起床 朝食	起床 朝食
9:30		料理を作ろう	自分で選ぶ活動 (創作・文化)	遠くへ出かけよう (昼食)	清掃・退所準備 お別れ会
12:00		昼食	昼食		昼食
13:30	出会いの集い お互いを知ろう	地域と交流しよう	自分で選ぶ活動 (スポーツ)		
18:00	夕食	夕食	夕食	夕食	
19:00	やまびこタイム 入浴	やまびこタイム 入浴	やまびこタイム 入浴	やまびこタイム 入浴	
22:30	就寝	就寝	就寝	就寝	

表4 活動内容例

お互いを知ろう	料理を作ろう	地域と交流しよう	自分で選ぶ活動	遠くへ出かけよう
自己紹介 オリエンテーション 名札づくり 施設見学、散策等	ハンバーグ ギョーザ 巻きずし 肉じゃが うどん ロールキャベツ 等	竹細工 わら細工 史跡見学 サイクリング 職場体験 農業体験	製作・文化活動 (七宝焼き、焼き板、 写生、紙すき など) スポーツ活動 (バスケットボール、 野球、グラウンドゴルフ など)	池や川での活動 (カヌー・魚釣り) 海辺での活動 (海水浴・磯観察) 山での活動 (ハイキング、スキー)

い方の説明、プログラムの説明、部屋割りの説明と順に進んでいく。説明等が終了した後、名札作り、各部屋の表札作りを行う。名札作りでは、ボランティアが声かけをしながら、自分が親しみをこめて呼んで欲しいニックネーム（愛称）を決めて書くよう呼びかけ、徐々に心を開くよう工夫している。部屋の表札作りでは、同じ部屋の友だちと初めて会話を交わしながら進めることから、うまくいかない時はスタッフ、ボランティアが中に入るようにしている。できるだけ、焦らず無理をせず一人ひとりの意志を尊重し、少しずつ打ち解けていけるようスタッフ、ボランティアが支援して進めていくのである。この出会いの集いでは、「緊張感」を取り去ることと、「安心感」を感じさせることが最も大切なことなのである。

b 施設見学と体験活動（1日目）

[内容と考察]

どのような施設でどんな活用ができるのかなどを知るため、施設内外をスタッフ、ボランティアが案内していく。広い施設内外を見学するには30分はかかる。入所者は、人との関係に不安を示す児童生徒が多いため、見学中、ひとりぼっちで歩く児童生徒がいないよう、ボランティアは特に注意を要する児童生徒に寄り添うよう観察している。見学が終了するまでにスタッフは友だち関係について細かく把握するよう努力している。

見学後、全員でスポーツ活動を行うが、この時間帯でのスタッフ等のかかわり方しだいでみんながとても仲良く打ち解けてくるようになる。これらの活動等を通して得た情報は、第1日目のケースカンファレンスで報告しあい2日目以降のかかわりに生かすようにしているのである。このようなケースカンファレンスは毎日行われ、翌日の活動に生かすようにされている。

c 調理体験（2日目）

[内容と考察]

まだ人間関係の築けていない状態で、みんなの協力が必要な料理を作る。食に関する体験活動の共通のめあては、「自分たちで作った料理をみんなで食べる。」ことで、料理を楽しく協力して作ることで、成就感や一体感を味わわせるのである。

得意な者と不得意な者もいるが、幅広くどんな児童生徒もかかわることができるよう作業計画を工夫することで、慣れない手つきで包丁を握り、どの児

童生徒も真剣に、そしてわいわいと楽しみながら取り組んでいる。施設の畑で育てた作物を使うこともあったりするが、できあがったものをどの児童生徒も「おいしい。」と言って食べている。自分の力で作りあげたという充実感が伺える。また、みんなで作るという体験が友だちづくりにも大いに役立っている。

d 地域と交流しよう（2日目）

[内容と考察]

与布土地区を中心に、自然散策やサイクリング、スケッチを楽しむ、さらには地元の人と一緒にしめ縄作りや木工細工、和凧作りをしたりと緑豊かな自然のエネルギーを得てのびのびと活動できるよう工夫されている。入所者は都会からの児童生徒が多く、自然の中でのんびりとした状況に身をおき心が癒されていくようである。また、地元の心やさしい人々と交流し、しめ縄作りや木工細工等を体験する中で、伝統文化のすばらしさにも触れたり、人とかかわる楽しさを味わっていくようである。

e 自分で選ぶ活動をしよう（3日目）

[内容と考察]

自分の体験したいことを選択してスタッフと共に活動を行う。自分が選択した体験活動を最後まで主体的にやり抜くことで、満足感や達成感を味わわせるとともに自主性や自立心を育てていくのである。

午前中は、製作活動が中心でもくもくと製作に取り組み、作品ができあがると非常に満足そうな表情を浮かべている。午後はスポーツ活動で、仲間とともに思い切り体を動かし、汗をかく。友だちと一緒に汗をかくことで友だちとの信頼関係が深まっていく。また、スタッフの励ましの中で、その子ども自身が持っている能力を引き出し、自信をつけさせるのにも役立っている。基本的には一人一人にスタッフは割り当てられ、励まし認めるサポートに心がけて展開しているのである。

f 遠くへ出かけよう（4日目）

[内容と考察]

弁当をもちマイクロバスを使用して、一日の日程で施設内ではできない体験活動に出かける。入居者同士の人間関係を成立させ、集団での活動ができるようになることや忘れられない思い出づくりをすることが目的である。

できるだけ児童生徒の希望を取り入れ、季節や天候等を考慮して行き先と活動内容を決定する。春秋

はハイキング、山登りなど、夏は海水浴・海釣り・川遊びなど、冬はスキー・スケート・雪遊びなどである。

友だちやボランティアと楽しく活動ができ、目標があり、ある程度負荷のかかる活動で達成感を味わうことができ、印象に残ることが多いようである。

g やまびこタイム

[内容と考察]

プログラムで決められた活動と活動の合間や夜の自由時間のことを「やまびこタイム」と呼んでいるのであるが、児童生徒の自主的な活動を通して、自主性、自立性を養うとともに、制約されない自由時間をゆっくりと過ごすことで、自分を見つめ直し振り返り、心身のリフレッシュを図っているのである。

「やまびこタイム」は、どのように過ごすかを本人が決める自由な時間である。一人で読書や勉強をしたり、友だちと卓球やビリヤードをしたり、グループでトランプやゲームをしたり、全員でフールツバスケットをしたりしてゆったりとした時間を過ごす。児童生徒にとってもこの時間は重要な時間と位置づけているようである。仲間と寝食を共にする中で人間関係をつくり、人との関係をもつことに自信を取り戻していくためには、この時間は最も有効である。スタッフも児童生徒の動きを細かく観察している。できるだけ自室に引きこもることがないようにボランティアと一緒に配置しサポートに努めている。

このような自由活動を通して、友だちと徐々に打ち解け、週の後半になると、みんなで一緒に一つのゲームをすることが多くなっていく。また、入所者同士で悩みなどを相談しあう場面も見られ、同じ悩みを抱える仲間がいることで、安心感と連帯感を生んでいるようである。

h お別れ会

[内容と考察]

最初、スタッフとボランティアが、入所者の一人ひとりに入所期間の感想や出来事についての評価を交えながらメッセージを送っていく。その後、入所者と保護者が一人づつ一週間の感想を述べていく。最後にみんなで歌を歌い、スタッフとボランティアが一人ひとりと握手して終わるのであるが、入所者の児童生徒は、スタッフとボランティアのメッセージを真剣な表情で聞いている。スタッフとボラン

ティアは、期間中児童生徒が努力したこと、自分たちが気づいていなかった行動のよいところ、人とかかわりでよかったところを褒めてメッセージを送っていくのであるが、このことから児童生徒は、自分を再発見したり自信をもつことができてくるようである。みんなで歌を歌うときには、感極まって泣き出す者もいる。最後の握手は、スキンシップによって人と人の互いのぬくもりを感じ取ることができるようである。

(2) 児童生徒の心に残った体験活動について

平成21年度に但馬やまびこの郷が調査した結果(心に残った体験活動)によると、一番心に残った体験活動は、「やまびこタイム」18.6%、「遠出」14.5%、「料理」13.8%、「スポーツ」13.8%、「お別れ会」11.0%などの順となる。

「やまびこタイム」は4泊5日の夕食後から就寝までの時間に設定されており、子どもたちは、一緒に入浴したり、ゲームをしたり、テレビをみたり等自由な雰囲気の中で、ゆったりと自分にあった形で楽しく過ごせる時間であり安心できる居場所が保障されている空間と考えることができる。

また、「遠出」は遠くに出かけ、山登りやカッター実習等仲間とともに励まし合いながら達成した成就感等があり自己有用感を実感できるからこそ心に残る体験であると考えられる。

不登校児童生徒は、日頃から友だち等と楽しくかかわり心を開いて接することが少なく、活動も消極的で自己有用感を感じることが少ないためこのような体験活動が本当に心に残る活動となるのであろうと考えられる。

3 但馬やまびこの郷での体験活動の不登校児童生徒に対する有効性について

但馬やまびこの郷に入所して来た児童生徒がどのようなきっかけで不登校となり、但馬やまびこの郷での体験活動を通してどのように変化していったのか、調査結果から但馬やまびこの郷での体験活動の有効性を分析してみたい。

(1) 登校しにくくなったきっかけ

平成21年度に但馬やまびこの郷の宿泊体験活動をした小学生(第6学年を除く)及び中学生(第3学年を除く)を対象に調査した、登校しにくくなったきっかけは以下の通りである。

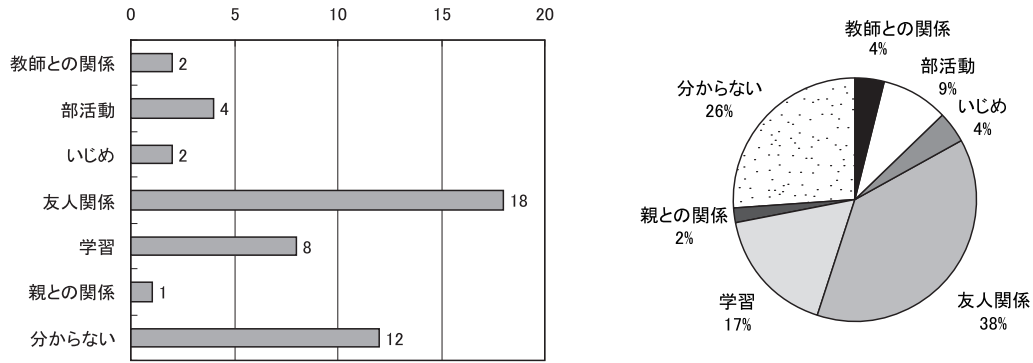


図2 登校しにくくなったきっかけ (平成21年度但馬やまびこの郷調査)

これを見ると「友だち関係 (いじめを除く)」が圧倒的に多く、「教師との関係」「いじめ」「親との関係」など、人とかかわることの要因が半数を超えていることが分かる。また、「分からない」と回答している割合も高い。自分自身で認識できずに学校に行きにくくなっている子が多いということが調査結果から伺える。

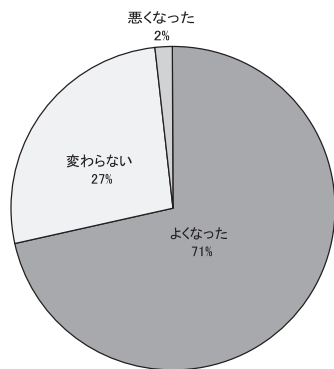
(2) 但馬やまびこの郷を退所してからのその後の状況

(以下平成21年度追跡調査から)

登校状況については、利用前にはほぼ毎日登校している割合が17.3%であったのに対して、利用後は、

学校40.4%と高くなっている。また、登校していない割合が28.8%だったのに対して、利用後は、23.1%と減少している。これらの結果から、多くの児童生徒が、但馬やまびこの郷の利用後に学校復帰に向けて動き始めていることが分かる。

また、生活の様子の変化については、家庭では、「特に変化なし」の割合が54%と高いが、「規則正しくなった」(「ほぼ規則正しくなった」を含む)は43%である [図5]。学校では、「良くなった」(「少し良くなった」含む)の割合が半数以上を占めており [図3]、「笑顔が見られるようになった」「自分から話をするようになった」「あいさつをするよう



- ・年度内に登校状況が改善された割合71% (45/63人)
- ・年度内に変化がなかった割合27% (17/63人)
- ・年度内に登校状況が悪くなった割合2% (1/63人)

図3 平成20年度のみ利用した児童生徒 (年度をまたがらない利用者) 状況

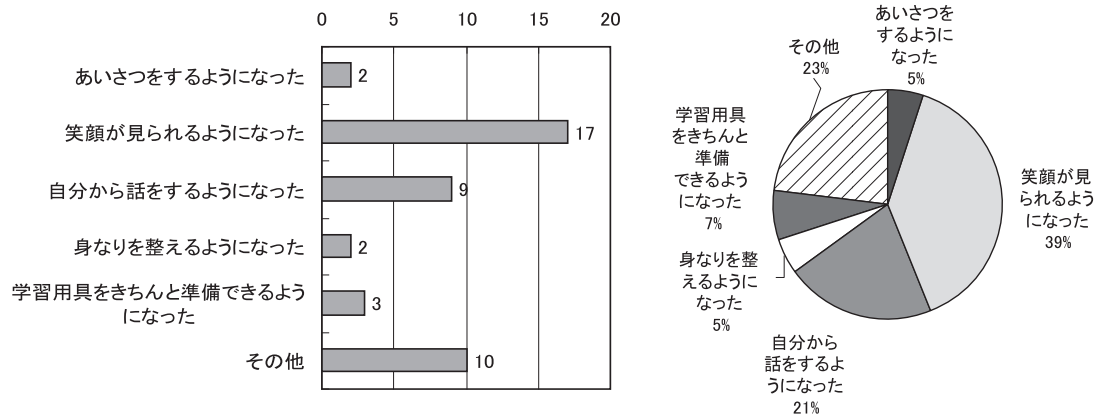


図4 学校での生活の様子 (どのように良くなったか)

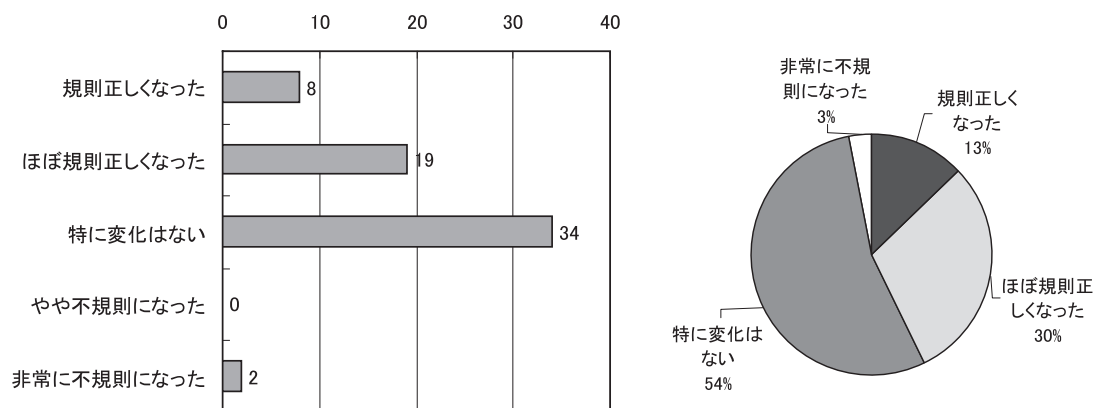


図5 家庭での生活の様子（どのように良くなったか）＜保護者用より＞

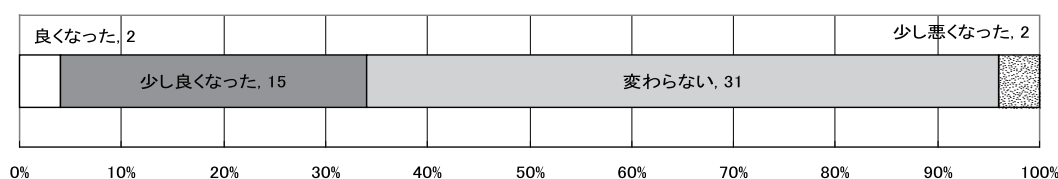


図6 友だちとの関係について＜学校用より＞

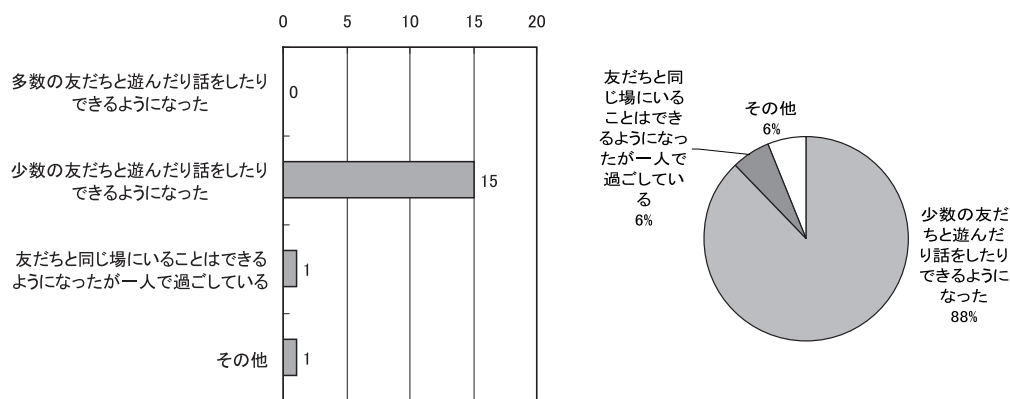


図6-1 友だちとの関係について（どのように良くなったか）＜学校用より＞

になった」など、対人面での改善が見られるとともに、「身なりを整えるようになった」「学習用具を準備できるようになった」などについても改善しつつある [図4]。但馬やまびこの郷での体験を通して自信を取り戻し、気持ちに余裕が出てきた結果であると考えられる。

友だち関係の変化についても利用前と利用後では変化がある。「良くなった（「少しでも良くなった」を含む）」割合が17% [図6] となっている。また、「どのように良くなったか」の問いに対して、学校では、「少数の友だちと遊んだり話をしたりできるようになった」が最も高く [図6-1] 友だちと遊ぶなど積極的にかかわる変化が見られる。

但馬やまびこの郷での活動とその分析でも論述したように、但馬やまびこの郷での仲間やスタッフと

の生活が人間関係の広がりをもたらし、積極性が出てきたと考える。

4 不登校児童生徒に有効な体験活動とは

但馬やまびこの郷を訪れる不登校児童生徒に全体的に共通しているものとして、学校や家庭で「居場所がない」と思いこみ、安心感や自分自身の存在感をなかなか得られない。また、何事にも自信をもてず、日常的な学校生活等の中で、成就感や満足感を味わう経験も極めて少ないため、自分がしたいことは特になく、誘われても何もしない。さらには、自主性や主体性に乏しく、耐性も大変弱く、友だちについても仲良くしたい、話しをしたいという思いを強くもっているがなかなかできずに一人で悩み、いつも一人であることが多いという児童生徒が多い

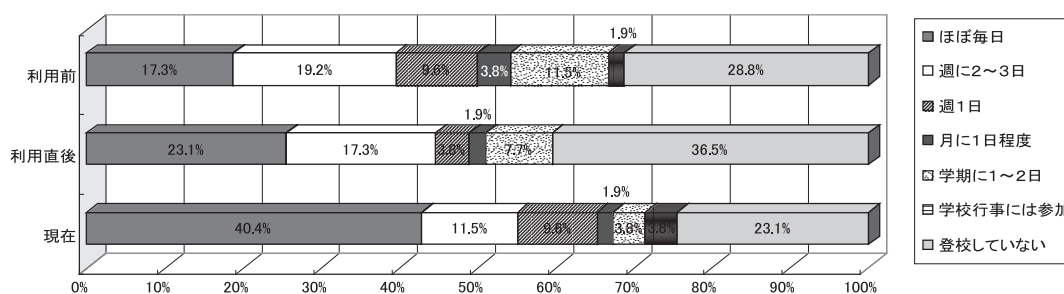


図7 登校状況

るということである。

このような不登校の児童生徒が、自信をもち、そして自らを変え前向きに進んでいくための有効な体験活動とは何か、但馬やまびこの郷の体験活動を通して考えてみたい。

(1) 「子どもの居場所」を見つけるためのスタッフ等との触れ合い活動

学校や家庭で「居場所がない」と言って但馬やまびこの郷に入所してくる児童生徒は大変多い。感受性がとても強く他人の目を常に気にすることが多く、安心して落ち着いた日常生活が出来ない。また、自分自身の存在の重みすら十分に感じとれていないことも多くある。

このような児童生徒に対して、スタッフやボランティアは温もりのある触れ合いに心がけ、心から笑顔で「よく来たね。」というメッセージを送っている。このような心が伝わってくれば児童生徒は徐々に心を開き、安心感や自分自身の存在感も持つようになってくる。

児童生徒が入所してきたとき、まずスタッフの誰か一人だけと信頼関係をつくるように心がける。どのスタッフが合うのか最初はわからないがいろんなスタッフが順次アプローチしていく中でうまく合うスタッフと関係を作っていくことから始める。スタッフは常に「安心感を与える」ことに細心の注意を払って接するよう心がける。このことで、人から認められること少なかった児童生徒の心は徐々に開かれ、安心して話しをしてくれるようになっていく。

このようなスタッフやボランティアの関わりや動きはとても有用で大切に、この関わりの中で児童生徒は自分という存在を改めて認識し、安心感もち徐々に「心の居場所」を作っていくのである。このようなことが児童生徒の変化を促す第一歩になると

考える。

(2) 段階的なアプローチで友だちと交わる力を育成するための集団活動

不登校児童生徒のほとんどが友だちを欲しがり、どうすれば友だちができるのか、また、どうすれば友だちと交わることができるのか悩んでいることが多い。それに対する但馬やまびこの郷での取組の一例として、ゲームなどでの集団活動における段階的なアプローチがある。

ゲームをする場合、まずスタッフ及び学生ボランティアは児童生徒と一対一の関係を重視し、児童生徒とのよき関係を作っていく。その関係がより深まってくれば、次に他の児童生徒を自然な形で加えてダブルスへと発展させいく。そして次にダブルスの相手を変えながらゲームを展開していく。このように段階的に集団活動(ゲーム)を広げ展開していく中で、児童生徒本人が気づかなく子どもたち同士の関係が広がっていく。一日目はなかなか打ち解けることができなくても、数日間生活を共にし、集団活動をする中で、段々と打ち解け集団の中に入り込み、集団の輪が広がっていく。このように段階的なアプローチは極めて有効であり、児童生徒が知らず知らずに友だちと話しをしたり、遊んだり、交わることができるよう仕組んでいくことが重要であり。このような活動の中で友だちと交わることができる能力が育っていくようである。

(3) 自信を持たせ、耐性を培うための体験活動

不登校児童生徒は、通常の学校生活の中で成就感・達成感や満足感を味わう体験が非常に少なく、何事にも自信をもてないことが大変多い。さらに、このような体験が少ない児童生徒は耐性が弱かったり、何をしても長続きしなかったり、目標をもって何かに取り組む姿勢が弱かったりする。人との関係においても同じように長続きしなかったり、すぐに

あきらめ関係をもつことを不安に思ったりすることが多い。但馬やまびこの郷では、「遠くにでかけよう」や「製作活動」などの体験活動で、新しい経験に挑戦させ、最後まで成し遂げさせることで、また、児童生徒が成し遂げたことやその過程で努力したことをスタッフ等が評価することで、子どもたちに自信と達成感や成就感、勇気を与えている。さらには、自然や地域でグループ活動をする中で、自ら友だちや地域の人々とのふれあいの輪を広げていくことで、心を開放させ、今まで学校で悩んでいた人間関係づくりに少しずつ自信が持てるようになっていくのである。

(4) 自主性、主体性を獲得させるための体験活動

不登校児童生徒は、誘われても何もしなかったりとか自分から進んですることもないなど自主性や主体性に乏しく、表現力も十分でないことが多い。

このような場合、但馬やまびこの郷の「自分で選ぶ活動」に見られるように、選択肢を設け必然的に選ばなければできないような活動を用意していくことが有効である。事実、これまで入所したどの児童生徒も何も選択しないということはない。初めて挑戦する体験活動を選択したような場合は、自主性という面からみれば次へのステップに繋がっていくことが多い。また、自分の考えや自分の思いで選びやり抜いたことが自分自身を見つめ直す機会となったり、今までにない自分を発見しそのことが大きな自信となっているようである。このように自主性や主体性を育成するには、常に選択肢を用意した活動を

用意し、振り返りをさせていくことが極めて有用であると言える。

おわりに

このように、但馬やまびこの郷の活動と児童生徒の様子を分析すれば、不登校児童生徒にとっては、自由な雰囲気ではあるが目的を持った意図的な体験活動がいかに重要であるかが見えてくる。

不登校は、児童生徒が成長し発達していく過程で育成されなければならない力（能力）が十分に備わっていないということも一つの要因であると言えるかもしれない。但馬やまびこの郷は、不登校児童生徒が人と人との関係の中でゆとりをもって、よき関係を保ちながら過ごせるよう体験活動を中心に据えて、成長し発達していく過程で育成されなければならない力（能力）を児童生徒に再び育成すべく懸命に取り組んでいるのではないだろうか。

引用・参考文献

- ・厚生省『児童福祉白書』1963年
- ・「いじめ・不登校」伊藤茂樹編著（日本図書センター）
- ・「今後の不登校への対応の在り方について（報告）」（文部科学省2003年3月）
- ・兵庫県立但馬やまびこの郷「10周年記念誌」（平成17年11月）
- ・不登校児童生徒の「適応の場」に関する総合研究（研究代表 東京家政大学教授相馬誠一）
- ・但馬やまびこの郷平成21年度 追跡調査結果から
- ・「子どもの発達と学校」宮川充司・大野久・大野木裕編（ナカニシヤ出版）